

第5章 疑問詞

第1節 疑問詞の概要

1. 疑問詞とは

「**疑問詞**」とは、「Yes」か「No」を尋ねる一般疑問文を作るのではなく、「誰が～？」や「いつ～？」など、「**具体的な答え**」を直接求める「**直接疑問文**」を作るための品詞です。

(★「疑問詞を使った直接疑問文」→ P. 22 参照。)

2. 疑問代名詞と疑問副詞

「疑問詞」には、「**疑問代名詞**」と「**疑問副詞**」の2種類があります。

「疑問代名詞」は、「**who**」「**whose**」「**whom**」「**which**」「**what**」の5つです。「疑問代名詞」は「代名詞」なので、「人称代名詞」と同じように、文中で「**主語**」「**動詞の目的語**」「**補語**」「**前置詞の目的語**」のいずれかとして機能します。

一方「疑問副詞」は、「**when**」「**where**」「**why**」「**how**」の4つです。「疑問副詞」は「副詞」なので、普通の副詞と同じように働き、「動詞」や「形容詞」や「副詞」を修飾します。

(★「品詞3：代名詞」→ P. 2 参照。)

(★「品詞5：副詞」→ P. 2 参照。)

疑問代名詞	疑問副詞
who (誰／誰が)	when (いつ)
whose (誰の～／誰のもの)	where (どこで／どこに／どこへ)
whom (誰を／誰に)	why (なぜ)
which (どっち／どれ／どっちの～／どの～)	how (どうやって／どんな具合に／どれくらい～／どのような～)
what (何／何の～)	

3. 疑問詞の働き

疑問詞には、「具体的な答え」を直接求める「**直接疑問文**」を作る働きと、「尋ねたい内容」を「名詞節」の形で表現する「**間接疑問**」を作る働きの2つがあります。

なお、疑問詞は、直接疑問文では「**文の先頭**」に置かれ、間接疑問では「**節の先頭**」に置かれます。疑問詞の部分が「前置詞の目的語」となる場合には、前置詞そのものは疑問詞の前ではなく、通常「**文の後ろの方 (たいてい文末)**」に置かれます

(★「疑問詞を使った『間接疑問』の表現」→ P. 24 参照。)

第2節 疑問詞による直接疑問文

1. 疑問代名詞による「直接疑問文」の用法

(1) 疑問代名詞「who」を使った直接疑問文

「**who**」は「誰?」の意を表す疑問代名詞の「**主格**」です。「彼」の意を表す人称代名詞の「he」が「he (主格) → his (所有格) → him (目的格) → his (独立所有格)」のように「格」によって変化するのと同じように、疑問代名詞の「who」もまた、「**who (主格) → whose (所有格) → whom (目的格) → whose (独立所有格)**」のように「格」によって変化します。

(★「名詞の格」→ P. 41 参照。)

(★「人称代名詞表」→ P. 58 参照。)

「who」は「主格」なので、文中の「**主語**」や「**補語**」として機能します。文によっては「who」が「主語」と「補語」のどちらにも解釈できる場合がありますので、文脈から読み取るようにしましょう。「who」が「主語」として機能し、直接疑問文を作っている場合には、それに対する返答文では、「代動詞」が使われます。

(★「『代動詞』の用法」→ P. 102 参照。)

なお「who」に限らず、「疑問代名詞」は通常「三人称・単数」の扱いになります。

例1: **Who** cooks in your family? / I do.

「あなたの家族では誰が料理するのですか?」「私がします。」

(「主格」の代名詞として機能し、述語動詞「cooks」の「主語」となっている。「三単現」の条件が揃っているため、述語動詞は「cooks」という形になっている。また、返答文では、代動詞「do」が使われている。)

例2: **Who** is that man? / He is my son.

「あの男性は誰ですか?」「彼は私の息子です。」

(「主格」の代名詞として機能し、述語動詞「is」の「主格補語」となっている。)

例3: **Who** is your coach?

「誰があなたのコーチですか?」→ John is. 「ジョンです。」

「あなたのコーチは誰ですか?」→ It's John. 「それはジョンです。」

(「主格」の代名詞として機能し、述語動詞「is」の「主語」あるいは「主格補語」となっている。この文の「who」は「主語」と「補語」のどちらにも解釈できる。)

(2) 疑問代名詞「whose」を使った直接疑問文

「**whose**」は、疑問代名詞「who」の「**所有格**」または「**独立所有格**」です。

「whose」が所有格となる場合、「whose」は「**誰の〜?**」の意を表し、後ろの名詞を修飾します。つまり「whose + 名詞」が1つのかたまりとなって文中で機能します。

第4節 疑問詞を使った「慣用表現」と「会話表現」

1. 疑問詞を使った「慣用表現」

「慣用表現」とは、「文字通りの意味」としての表現ではなく、元々の意味から転じて「別の意味」となったものが広く一般的に使われるようになった表現のことです。

(1) 「Why don't you + 動詞の原形～?」「Why don't we + 動詞の原形～?」

「Why don't you ～?」は、文の受信者に対して「～してはいかがですか?」という「提案」の意を表します。また「Why don't we ～?」は、文の受信者を含んで「私達自身」について「(いっしょに) ～しませんか?」という「提案」の意を表します。ただし、どちらも「なぜ～しないのですか?」という文字通りの意味になることもありますので文脈から判断するようにしましょう。

例1: **Why don't you sit** down?

「(あなたは) 座ってはいかがですか?」

「(なぜあなたは座らないのですか?」と解釈される場合もある。)

例2: **Why don't we eat** out?

「(いっしょに) 外で食べませんか?」

「(なぜ私達は外で食べないのですか?」と解釈される場合もある。)

(2) 「Why not?」

「Why not?」は、元々は「なぜ not なのか?」のように「否定する理由」を尋ねる場合に使われる表現ですが、「否定する理由はあるのか?」という意味から転じて、「もちろんいいよ」という「承諾」の意を表す場合にも使われるようになりました。

例1: Don't listen to him. / **Why not?**

「彼に耳を傾けてはいけない。」「どうしていけないの?」

例2: I want to see this movie. / Okay, **why not?**

「私はこの映画を観たい。」「いいね、そうしよう。」「

(3) 「How come + 主語 + 述語動詞～?」

「How come + 主語 + 述語動詞～?」は、やや「驚き・意外」を含んで「どうして?」という疑問文となります。この時「How come」の後ろは「平叙文」の形のままとなります。

「why」と異なり、「how come」には「どういういきさつで～?」や「どういう理屈で～?」というような意味合いが含まれます。

(★「平叙文」→P. 19 参照。)

例: **How come** she likes you? / I don't know. I want to know that, too.

「どうして彼女は君が好きなんだ?」「分からない。俺もそれを知りたいよ。」